愛知工業大学研究報告
第３４号Ａ　平成１１年

資本主義国家でのRobert Frostとニューイングランド

Robert Frost and New England in the Capitalist Nation

坂本季詩雄
Kishio SAKAMOTO

SUBSCRIPT: Since the colonists from Britain arrived the new land which they called Virginia, the land has given the great opportunities to construct the immaculate Eden and create enormous wealth. Thomas Jefferson as the third president of the United States inspired an ideal of freedom and equality for this world first democratic nation whose society should be founded on agriculture but his ideal included a contradiction in which nature and humans could not live in perfect harmony. After the mid 19th century American society has been influenced by developing capitalism, in which humans utilized nature with technology like steam engines for its own use.

Literature as an art could not be an exception to the capitalism. Even the elite artists like Emerson and Thoreau should establish their art conforming themselves to the capitalist society in the 18th century New England. Robert Frost, as a New England writer in the 20th century, created his own art in the genealogy of those two former great artists in the highly capitalized society. This paper examines how Jeffersonian ideal should be transformed by capitalism, and New England writers have accepted the conflicting relationship between nature and capitalism.

はじめに

フロストはニューイングランドの生活から、独自のリズム、イントネーションを学んだ。それはそこでの生活に根ざしたもので、エマソンやソロウの伝統をうけついだ自然観が現れていると同時に、彼が詩を創作した１８００年代終わりから１９００年代初期の資本主義的アメリカ社会の時代意識がそこには加えられている。トリリングはその点を指摘して、彼を"terrifying poet"と呼んだのである。

ニューイングランドの風土の中で、エマソンとソローという先人達も直面せざるを得なかった資本主義・商業主義が支配する世界と、フロストはどのように折り合いをつけたのだろう。この論文の中で私は自然と産業社会の対立がニューイングランドの風土においてもその土地の作家の創作活動に大きな影響があったこと軸に、エマソン、ソローへさかのぼり、彼らからフロストへと受け渡されていったものは何であるのか、フロストの独自性は何なのかを考えたい。

I　農本主義共和国の理念

牧歌・田園詩と訳されるパストラルは、ヨーロッパでは古典期以降、多岐にわたるジャンルを構成している。この文学形態の根本には、自然と人間が完全調和の状態にあった、「黄金時代」へ回帰したいという願望があった。

１８世紀になるとニュートンの物理学的発見は、世界を科学技術の視点から見ることで人間と自然の間にあった関係に大きな変革をもたらした。ニュートンはリンゴが木から落ちるのを見て、物体の落下の法則と天体の運行法則をひとつにまとめた。世界の秩序をたった一つの単純な数学的法則で示した。その時代風潮の中でヨーロッパでは従来の田園詩は顧みられなくなる一方で、田園的風景と田園生活へのあこがれが高まっていった。本来文学的形式であったパストラルは、アメリカでは同じ時期に思想的・政治的な目的に転用されることになる。

1607年にイギリスによる北米植民開始され、ヴァージニア会社によるジェームズタウン設立され

た。南部の大西洋岸の肥沃な土地、ヴァージニアやメリーランドでタバコや米の栽培が行われ輸出された。１７０５年に植民地時代初期の作家、ロバート・ベヴァリーRobert Beverleyは『ヴァージニアの歴史と現状』*History and Present State of Virginia*のなかで、初期の移民達がアメリカを新たなエデンと考えたことに感銘を受けている。当時のヴァージニアは自然が人間の手によりけがされていず、神の創造した当時の姿を示していて、そこに住む原住民も無垢で「高貴な野蛮人」であるまさに「処女地」ということをベヴァリーは初期の渡航者達の旅行記を読むことで知る。

そしてこのような原始主義的理念が彼の書物を貫くものではないことをLeo Marxは『楽園と機械文明』*The Machine in the Garden*の中で重視している。彼はベヴァリーの使う「ガーデン」という言葉の意味のずれに注目し、それがアメリカのパストラル理念に初期から内包されていた根深い矛盾と考える。つまりヴァージニアのことを神話的・聖書的意味合いでうけとり、「高貴な野蛮人の住む原書の輝きを有する楽園として描かれる」一方、人間が開発した土地で、そこから豊かな産物が生み出され富をもたらすという考えがベヴァリーの書物に見られるという。この楽園についての二つのイメージの違いは、原始主義的理念と牧歌的理念の間に大きな隔たりがあることを示しているとマークスは指摘しているのだ。[1]

トマス・ジェファソンの『ヴァージニアに関する覚え書き』*Notes on Virginia*が１７８５年に出版される時までに、ヨーロッパでは風景を美的鑑賞の対象とし、ビューティフル、ピクチュアレスク、サブライムな風景とする鑑識眼の基準が定められていた。科学的・商業的時代が始まり、その時代にふさわしい自然と人間が完全調和の状態を模索することが求められるようになったのだ。都市や資本主義の発展に対して、農業によって支えられる田園生活は道徳的・美的に優れていると考えられた。しかし実際には都市化や商業主義の流れは押しとどめられるものではなかったので、未開でも都会的でもない理想的な状態として田園的秩序の支配する「中間の状態」が考え出される。

そしてこの「中間の状態」をアメリカ的に実現すべくイデオロギー化し、生まれたばかりの民主主義国家アメリカの理想像としたのがトマス・ジェファソンである。彼によると、アメリカの広大な土地は、自然との調和を保つ農業生産者は、勤勉で徳の高い小規模自営農民（ヨーマン）によって耕されるべきだとされた。ジェファソンが理想的生活として思い描いたパストラルは、ルソーのとなえるようなヨーロッパ啓蒙思想から受け継いだものである。それは文明の発達過程は、狩猟の未開から牧羊者の野蛮の状態を経て耕作者の開花があり、その後に人間の堕落がはじまったとする。そしてそれ以前の自然状態に自由や平等が起源することを探ろうするものだ。アメリカが新興国として成立するため必要な枠組みはこのような自由と平等だった。そしてアメリカには文明に汚されていない無垢な自然状態をたもつ広大な西部がいまだ存在し、無垢な独立自営農民の支える、美しい田園風景の広がる国家建設の理想を思い描くことが可能だった。

ヘンリー・ナッシュ・スミスHenry Nash Smithは『ヴァージン・ランド』*Virgin Land*の中で、小規模自営農民とアメリカ民主主義について次のように指摘している。

> ヨーマンという語自体がアメリカ語では意味を変えた。西部自作農は、ほとんど無際限の意味をにないうる象徴となった。それは愛国主義の強いニュアンスを含み、深遠な社会理論を暗示する語であった。この象徴の意味の遍歴は、注意深い観察に値する。それは合衆国における民主主義諸観念の発達の仕方を、最も具体的に示すものの一つなのだ。[2]

独立自由農民は農業共和国建設の前提条件である、倹約、勤勉、高潔、などの徳と、自由、平等、独立をあらわすイメージをになう一方で、領土拡張を有効に機能させる装置となった。

II　エマソンと資本主義時代の農業

エマソンの農業に対する考え方は、ジェファソンの伝統の延長線上にあった。１８２０～４０年にかけてニューイングランド南部を中心として発達し始めた木綿工業をきっかけに、アメリカでの産業革命は進んだ。１８３０年代には鉄工業がペンシルベニア州やニューヨーク州の西部、ニューイングランド、オハイオ州で急速に発展する。この時代に国内出生率は高まり、大量の移民の流入とあいまって労

働力は拡大し、製造業のさらなる発展を約束した。１８２０～６０年の間に人口は一千万から三千百万へふえ、都市人口は八倍になり、鉄道の敷設距離は全くなしの状態から三万マイルに達した。[3]

資本主義経済が発展するなか、市場の経済取引に依存せずに、できるだけ自律的生活を農業によって成し遂げることに意義を見いだしたエマソンだが、家族に基盤をおく家内工業はすでに過去のものとなり、都市化と資本主義化が人々の生活を支配する時代が到来したことを認識していた。１８６０年にはブルック・ファームの失敗をふまえてジェファソンの理想とした田園生活は産業主義が蔓延した現状では成り立たないことを『富』というエッセイの中で述べている。

> ２０年前、このニューイングランド地方の教育ある人々の間に、一種の田園生活を謳歌する風潮が起こった。農夫になり、耕作と知的な研究を結合しようと言う熱烈な願いである。多くの人がこの目的を実行に移し、実験を行い、あるものは純然たる農夫になった。しかし結局全ての人が、学問とみずから手を下して働く実際の耕作は両立しうると言う信仰を放棄することになった。[4]

この時、すでに農業はエマソンにとって、自由と独立を保証するものではなくなっていた。

そしてエマソンが資本主義的世界の発展の勢いに抗しきれなくなったことを自覚するのは、実は出版業においてでもあった。１８２０年までは書籍の製造費は高額で普及させることが困難であった。また版権という問題が顧みられることのなかった時代、アメリカ人の作品を出版するよりも既に名のしれた外国書籍を出版することに業者はむかった。しかし１８５０年までには印刷技術が発達しだしたために、大量の書籍を廉価で発行することが可能になる。白人成人の９割は読み書きができたので、書籍の市場は潜在的に大きかった。そこで需要と供給の関係が互いをあい満たすことになり、出版業が盛んになる。

> １８２０年から１８３０年にかけてアメリカ人は自国民の手になる文学作品を１０９点出版した。１８４０年代になるとこの数はさらに飛躍し、ほぼ一千点にも上った。製造販売されたあらゆる分野の書籍の年間の額面価値は４０年代の終わりには１２００万ドルに達し、１８２０年の５倍以上になった。出版は産業となってしまい、作者は文学市場の商品生産者となったのである。[5]

こうして文学作品も市場経済の中に見事に組み込まれてしまったことは誰の目にも明らかであった。エマソンやソロー、ホーソン、メルビルなどはこの傾向に歯止めをかけたかったが、それができないことを実感していた。

さらに１８３０～４０年代はアンドリュー・ジャクソン大統領の時代であり、ジェファソン的パストラリズムの擁護と資本主義の発展を謳歌するという矛盾した時代風潮があった。この矛盾は、エマソンのエッセイの中にもあらわれる。本来卑屈と拝金を生み、徳の目をつみとってしまうはずであった、市場での商品と金銭の交換は、神が商取引をつかさどる主体となって、本質的に公正なものと理解されるようになる。

ジェファソン的パストラリズムに示されたアメリカの過去と、資本主義的繁栄という未来の間でおこる、エマソンの矛盾した態度は、『自然』（１８３６年）という書物の中でともに、彼の精神が作り上げる場である自然のなかで結びつけられている。ニューイングランドは、上のような事情から、１９世紀には精神的に解体されていくなか、エマソンは変わることのない真実を映し出すものとしての自然を基盤に、（自然が不変なのはつねに新たなはじまりが繰り返されているから）あらたなアメリカ的創造を企てるよう方向転換を図っていく。

エマソンは自然と対峙するときに、常に人間を中心に据える自然観をもっていた。あらゆる自然の要素は人間精神の働きにより理解されるからである。彼によると、あらゆるものと人間との関係を作り上げるときに、人はアナロジーをもちいる。それをもちいながら、存在するもの全ての中心に、「透明な眼球」として自らを置き、その周りの事物との関係のなかで、お互いを知る。精神と事物は相関的関係を持つ。だから世の中の事物は人間の精神と関係を持つことによりはじめて存在するようになり、生み出されると考える。そのため主観のレンズのくもりはそれを取り囲む世界の濁りとして現れることになる。つまり人間の主観性が世界を創造するのだ。その延長線状で文学もその主観性によって創造され、

自然の存在と同列に扱われるべきものとなる。

この主観性を利用して異質な要素、自然と道徳観を結びつけるのは詩人の役目とエマソンは考える。彼の有名な「透明な眼球」は彼の見る意識である。眼球にうつる周りに展開する事象すべては、現実の自然、たとえば森の姿ではなく、その背後に存在する彼の精神である。彼のこの傾向はやはり１９世紀ロマン主義者のものでもある。自然は人間に奉仕すべき、従順な存在で、私により思いのままにつくりあげられるものとされるのだから。そのため自然へ帰属するべき野生の法則と、それとは異質の人間の道徳の間の違いはのりこえられてしまう。こうしてジェファソンでは田園生活に結びつけられていた道徳的法則は、エマソンでは自然と結びつけられてしまう。自然は人間と関係を持つことによって、はじめて意味をもちだす。これを可能にするのは、物事の表面だけしか見ない「野生の目」ではなく、普遍的なものを心に描き内面化する「心または理性の目」をもつことによってである。「理性の目」によって内面化される自然とは、神の声となり、自身の内面から魂に語りかける。ここに登場するのは詩人なのだ。

> 詩人は、事物を彼の思想に従わせる。・・・詩人は、自然を流動するものと見て、自分の存在を、自然の上に刻みつける。彼にとっては、人間の手に終えないこの世界は、従順で柔軟性をもつ。彼はちりや石に、人間性をまとわせ、これらのものを「理性」のことばとする。想像力とは「理性」が物質世界を利用する力である、と定義してもよいであろう。[6]

詩的想像力が、経済原理が支配する社会であらたなアメリカ像をつくりあげることになり、自然はそのために奉仕する、というのがエマソンの自然を功利的に利用する術である。このようなエマソンの態度にも、ジェファソンの推進したアメリカ的パストラリズムが内包していた農本主義を建前として共和制の美徳を維持することと、近代資本主義がもたらす利益を犠牲にしないという矛盾が含まれていることをギルモアは指摘する。

> エマソンは一方では商業本位の時勢に異を立てながら、他方、自然を支配するという、攻撃的で「資本主義的な」気風を洗練し、これを是認するわけである。　　ギルモア４３

II　ソローの自然と資本主義時代

レオ・マークスが、市場経済、技術の進歩という時代的背景を、ソローの『ウォルデン』（１８５４年）に重ねあわせて暴くアメリカ的イデオロギーをまとったソロー像も興味深い。ソローは１８４５年７月４日から２年２ヶ月ウォルデン・ポンドでの生活を始めた。彼のこの行為とその作品のあいまい性を、マークスは指摘する。

> 作為性を隠すという国民的芸術にたけていたソローは『ウォルデン』において田園への隠棲というという伝統的な文学的性格をぼかすことに成功する。一人称で物語を語らせることによって、その様式にめったになかった信頼性を与る。・・・ソローは、効果的な象徴が自然の事実からのみひきだされると信じ、自分の生活が象徴になるかもしれぬと考えて池のほとりに移り住んだのである。
>
> マークス２７０

牧歌的に見える『ウォルデン』の世界は、実は１８４５年当時のアメリカ社会の物理的、精神的状況を描いたものである、とマークスは見抜いている。ソローがみたコンコードの人々が市場経済の原理の中で、そのメカニズムの要求を満たすためにはたらき続ける姿を、マークスはT.S. エリオットが描いたロンドンの橋を渡る人々のみた心満たされない精神状態と同じものがすでにコンコードに存在したかのように指摘する。

> 意味なく、退屈で、習慣化された存在にあきらめを感じて、ソローの仲間の町の人たちは、喜びもなく怒りもなく、あるいは意志を強く行使することもなく、毎日の仕事を繰り返している。
>
> マークス２７２

ソローはこのような空虚な世界とりこんでが広がっていることを十分認識した上で、その状況を打開するために自然と機械の矛盾する関係をとりこむ。当時、最先端のテクノロジーを具現する、池の

畔へ敷設されたフィッチバーグ鉄道は、自然と相いれない存在としてとらえられる一方で、それにそなわる先進性はソローの関心をひきつける。鉄道は市場経済をアメリカのあらゆるところへ広め、自然を破壊する。しかし科学の生み出した産物として、人間に新たな生活をもたらす。この両面をふまえてソローは鉄道を人間の創造した力として、ウォルデンの水と並置する。さらにソローは自分と社会が鉄道によって結びつけられていることを指摘し、さらに科学技術の発展の危険性とともに、それから得られる喜びを表す。自然と機械は比喩的に結びつけられる。

> 機関車の汽笛は、夏も冬も僕の森をつきぬけ、まるでどこかの農家の庭の上を飛んでいる鷹のようだ。・・・何台も車両を引いた機関車が惑星のように・・・[7]

ソローは機械化と市場経済の進む現状をはっきりと直視し、ジェファソンのいうような田園的生活様式はもはや失われつつあることを認識する。次のような失われる田園生活と資本主義経済に組み込まれた農民の姿へのアンチテーゼのポーズをとることにそのことが確認できる。彼は自身でまめ畑をつくり、普通の農夫のようにたくさんの収穫のため、肥料を与えるなどの試みには欠けているが、収穫物を売りその収支を数字で細かく示し、（支出がくわ、まぐわいれ、うねたて、各種の種の購入費用、雇い人への給金などで１４、７２ドルあまり。支出は空豆、じゃがいもなどの売り上げ金、２３、４４ドル。）商業的農業を試みているすがたに現れている。もっとも８ドル７１の収入では生計をたてられず、日雇い人夫としてよそで働いた。このことは自分は資本主義的農民の真似事をしたにすぎなくて、彼らと同じ範疇に自分ははいらないということを明らかにするためであり、彼らの経済生活と自然を功利的に利用することへの批判をウォルデンの「豆畑」の章の中では展開している。

> 古代の詩や神話は、少なくとも、農耕がかつては神聖なものであったことを示している。けれど僕らは不遜なほど大急ぎで不注意にそれをやっている。それというのも、僕らの目的が、ただ大きな農場を持ってたくさんの収穫をあげることだけにあるからだ。・・・土地を財産、あるいは財産をえるための手段としてしかみないという僕らのだれもが持っている嫌らしい習慣や、強欲さや、身勝手さのために風景はゆがみ、農耕は堕落し、農民は一番いやしい生活を送っている。農民が自然を知っているのは、ただ泥棒としてだけだ。
>
> ソロー１２６

ソローが明らかにしようとしていることは、もはや自然は文学的経験のなかにしか存在しえないということなのである。「春」のなかで、線路沿いの土手の雪解けの描写には、自然が春になって命を取り戻したことの美しさが見られる。春は森のあらゆるところに魅力的な光景をもたらす。気温の上昇に伴い、池の氷が音をたて割れ、様々な小鳥をはじめ野生生物が姿を見せる。なかでも鉄道の通る両側のきりとおしの土手を流れる雪解け水の描写はうつくしい。

> 無数の小さな流れが互いに重なったり織り混ざったりし、半ば流れの法則に、半ば植物の法則に従って一種の混成物のような状態を見せる。ながれるに従ってそれは水分を含んだ葉や蔓の形になり、一フィート以上の深さの柔軟な小枝の重なりのようになって、上から見るとぎざぎざの葉の形をしたかさなりあったコケのように見える。あるいはサンゴ、表の爪痕かトリの足、脳や肺や腸、あらゆる種類の排泄物を思い浮かべるかも知れない。・・・はあざみ、ちこり、西洋キズタ、蔓、あるいはどんな植物の葉よりもふるくて典型的な建築用の唐草模様の一種といえる。
>
> ソロー２３８

ソローは流れる水が葉の模様となってながれるとき、地球の内臓のうごきを知覚できたような気分になる。「葉の形に水が流れるのは、原子が創意豊かに、アイデアをこねまわし、花形で自分を表現するから」と説明する。蝶やトリの羽、水、人間の手、森羅万象は一枚の葉との有機的関係の中にとらえられる。あらゆるものが相互依存しているイメージはエコロジカルな思想へとつながっていく。しかしもう一方で、それは個人的な、精神の創造的知覚、比喩によって語る力、などの文学的経験の中に自然がとらえられ、実現されているに過ぎない。現実には

存在しようのないパストラルを自らの意識の中に再現したのが、『ウォルデン』という作品といえるだろう。

そしてそうすることはソローにとって意識的な戦略であったのかもしれない。ソローの他の作品「市民の反抗」（１８４９年）『コンコード河とメリマック河の一週間』（１８４９年）は市民社会に対して何らかの影響を与えたくて書かれたが、前者は社会から得られた反応はなく、後者は指折りの失敗作と酷評されてしまった。そのため１８５４年に８年を費やして、刊行予定を５年も上回りやっと出版された『ウォルデン』では、ソローは市民社会に自らの著作が影響を与えることをあきらめ放棄してしまっていると、ギルモアは指摘する。

> ソローは新しい構想と歴史の新しい枠組みの板挟みになっている。すなわち、先駆者の権威を切望しながら、彼は自分の文章を商品と見なすことを拒み、「売らずにすませ」ようとするのである。「市民の反抗」と『コンコード河』の失敗は著者の反市場的な姿勢を強めることになったが、それと同時に、ソローは政治変革の志から身を引くことを余儀なくされたのである。売り上げを大きくのばさなければ世論を形成することはできないから、ソローは事実上市民社会についての目論見は捨てて、『ウォルデン』を難解な、読者自ら骨折らなくてはならない文章に、ということは、大多数の一般大衆には近づきがたい文章に、仕立てることに骨身を削る。
>
> ギルモア７５

IV　フロストと自然・資本主義

ニューイングランドにおいて、資本主義的未来と、それ以前のパストラリズムにあらわされる過去と関わりをもちつつ、エマソンとソローはそれぞれの視点から自然を利用し、エマソンは資本主義的枠組みに取り込まれ、ソローはその枠組みを自覚しながら逃れようとした。フロストの時代には資本主義と社会の関係、そして自然のとらえ方はどのようであったのだろうか。

フロストの時代には、資本主義社会の発展にともない社会が女性化していくことで、作家達は創作に苦しむのだという意識が広まっていった。１９０２年（フロスト２８才の時）に、ウィリアム・ディーン・ハウウェルズは商売が人を結びつける絆となっていて、それは友愛の絆と言うよりも、息をつまらせるような社会状況であることを暗示する。

> At present business is the only human solidarity; we are all bound together with that chain, whatever intenstions and tastes and principles separates us. [8]

ヘンリー・ジェイムズは*The Bostoinans*のなかで、

> the whole generation is womanized; the masculine tone is passing out of the world; it's a feminine, a nervous, hysterical, chattering, canting age, an age of false delicacy and exaggerated solicitudes and codled sensibilities. [9]

１９世紀末には、社会の女性化さらに進行していた。女性が社会で適切とされる服装や態度の基準を決めるようになる。さらにプロテスタント中産階級の気分をつくりあげ、彼女たちの価値観や感性が、文学的趣味を形作るのに大きな役割を果たした。文明とその道徳観を擁護する役割を果たすことで、中流階級の女性は、無分別な男性に影響を与えた。女性的であること自体がある種の影響力のある場となり、アメリカ男性の行動の自由さばかりか、考え方や感性の自由を犯しはじめた。

> They noted with concern that women now set the standards of appearance and decorum. Women established the sentimental tone of bourgeois Protestant religion, and their values and sensibilities played a major role in forming literary tastes. In private, women enforced sexual virtue. By carrying out their role as the guardians of 'civilized morality,' middle-class females affected men as agents of unreasoning restraint. [10]

資本主義化の過程で女性が社会の中で働くようになってきたことが、社会の女性化の背景にある。人手のかかる野良仕事では不可能であった社会体勢が、資本主義社会になってうまれたのだ。つまり男性は社会にでて生活の糧をえて、女性は家庭を守る

ことが社会のあるべき姿とされた。そして家庭で余暇時間をもつ女性は、読書をすることになる。（５０年代にテレビが登場したとき、テレビは家庭の中心にすえられて、家族全員がそれをかこんだように、１９世紀半ば以降は読書が家庭の娯楽の王座を占めるようになっていく。）多数を占める女性読者の趣味にあわせた商品（作品）を、出版業者は提供することになる。作家もそれに添った作品を生産するようになり、ますます本は売れるようになり、社会に女性中心のものの見方がますます社会に広がるようになる。

『緋文字』のなかで見せたように、ホーソンにとって、文明とは秩序、理性、情熱をおさえ、自然を征服し、動物的本能を高次の能力へと基礎くさせることを意味し、それは男性的な理想であり、男性によって維持されるものであった。しかしフロストの時代には、様子は変わっていたようだ。アメリカ男性が文学を生活の糧としながら、良心を保つことは難しくなった。それは男らしさが詩を書くような生活からは文化的に排除された行動指針となっていたからだ。フロストや同時代の男性詩人にとって事情は同じだった。

> For Frost and other young poetic modernist, manliness was quite simply the culturally excluded principle in a life given to poetry that made it diffcult for the modern Americam male to enter the literary life with a clean conscience. [11]

この時代風潮の中で、作家も資本主義社会の一員であるので、女性化した社会に適応した作品を書かずには、商品たる作品を売ることはできない。

しかもフロストはハーバードやダートマスで大学教育を受けるも短期間でそこから離脱し、２１才で結婚した後、１９１２年、３８才の時、妻子をかかえてイギリスへ渡り、詩集を出版するまで、いささか不熱心に農業に従事したりや教員をしながら、祖父から与えられた援助をもとに生活していた。農夫としても詩人としても芽も出ずに、経済的に、物質的に、精神的にも当時、勃興し進行つつあったアメリカ的資本主義社会からは疎外されていた。ニューイングランドの田舎暮らしをして、周りの人とのつきあいもろくにしていなかった彼は、一層強い疎外感を感じていたと思われる。

女性の価値観がアメリカ社会をおおうことにより、男はその価値観に飲み込まれるか、男らしい男になるかの選択をする必要があった。ただ文学を生活の糧にしようという作家にとっては問題はそれほど単純ではなかった。つまり男らしさの価値観（理知的すぎたり、感情を押さえすぎていたりする）を基盤に創作しても、端的に言って、売れないのだ。消費を至上目的とする資本主義社会では、そのような創作態度は許容されない。

フロストの作品は、エリオットやパウンドに代表されるようなアカデミックな作品とは趣が大きく異なる。しかし彼らと同じようにフロストも資本主義社会で、精神生活と現実生活の間に隔たりが生じていることにやはり気づいていた。（フロストは女性化する社会に苛立ちを覚えていた。第一次世界大戦に家族のいる彼は参加しなかったが、友人のイギリス詩人、Edward Thomasが戦争に参加するときには、彼の意志の立派さをたたえ、存分に戦場で男らしく戦ってくれることを望んでいる。）[12]

その作品は大衆から支持され、後にはケネディーの大統領就任式で白髪をなびかせ、自作を読み、詩人として文化的アイコンになり大衆に人気があった。一般大衆と気質的に、文化的に、政治的に異なる思想を持ちながらも、彼らと自分の感覚、思想をどのように調和させるかは、資本主義社会で彼がプロの詩人として生きていく上で大切な要素だったのかも知れない。このようなアメリカ的精神風土の中でフロストが「利用」したのがニューイングランドである。

ニューイングランドの風土の中で、フロストが利用したのは廃虚と女性であるである。１９世紀の終わりから２０世紀はじめの２・３０年は、社会ダーウィニズムと電球、電話、映画、自動車などの技術的進歩があいついだ。テクノロジーによって自然を人間に従属させることは、歴史の過程においても、自然の過程においても当然の帰結だとされる。フロストの作品で何らかの意味で廃虚を扱うものは、１９世紀のニューイングランドの村によく見られたが、フロストが作品にした時点では失われたり、失われつつあるものがよく見られる。埋まりつつある地下室跡、アンティークのおもちゃの家、古い林檎の木、朽ちかけた家などの過去をあらわすものは、

人間によって奪われていた支配権を自然がふたたび取り戻す過程の中に配置される。さらにその廃虚に見えかくれする女性は自然と同列におかれる。女性が自然が同列にに扱われるのは無秩序性、非論理性、野生性、非文明性などを共有すると、古来考えられてきたからだ。（ラカンやクリステヴァなどの精神分析理論においてもそういう位置づけを女性性はされている）さらに女性は家庭にも結びつけられる。家庭は２０世紀文学では消費経済が力を発揮する場所であり、様々な消費財があふれる場所と位置付けられる。

エマソンやソローは自然を、詩的創造力により男性の論理に引き寄せてしまい、矛盾する力を統合してしまった。エマソンは無垢な農民によって保たれる道徳観という、失われたジェファソン的理想を再建するために、野生性を本質とする自然に、人間性をあわわす道徳をとってかわらせた。一方ソローは資本主義社会において農業者は堕落しきっていて、もはやジェファソン的理想をになわせるべき存在でないことをはっきりと意識していた。しかし結局彼にとっても自然は文学的想像力の中にしか存在しない。（エゴを中心とする思想から、エコロジーを中心とする思想への転換を、彼の『ウォルデン』中に読みとるのがネイチャーライターたちである）

"The Census-Taker" は、木材産業が周りの森林を伐採し尽くし、そこに住んでいた作業員が、今は１人もいなくなったニューイングランドの山岳地帯にかこまれたある地域が舞台である。

I came an errand one cloud-blowing evening
To a slab-built, black-paper-covered house
Of one room and one window and one door,
The only dwelling in a waste cut over
A hundred square miles round it in the mountains:
And that not dwelt in now by men or women.
(It never had been dwelt in, though, by women,
So what is this I make a sorrow of?)
I came as census-taker to the waste
To count the people in it and found none,
None in the hundred miles, none in the house,
Where I came last with some hope, but not much,
After hours' overlooking from the cliffs
An emptiness flayed to the very stone.
I found no people that dared show themselves,
None not in hiding from the outward eye.
The time was autumn, but how anyone
Could tell the time of year when every tree
That could have dropped a leaf was down itself
And nothing but the stump of it was left
Now bringing out its rings in sugar of pitch;
And every tree up stood a rotting trunk
Without a single leaf to spend on autumn,
Or branch to whistle after what was spent.
Perhaps the wind the more without the help
Of breathing trees said something of the time
Of year or day the way it swung a door
Forever off the latch, as if rude men
Passed in and slammed it shut each one behind him
For the next one to open for himself.
I counted nine I had no right to count
(But this was dreamy unofficial counting)
Before I made the tenth across the threshold.
Where was my supper? Where was anyone's?
No lamp was lit. Nothing was on the table.
The stove was cold--the stove was off the
chimney--
And down by one side where it lacked a leg.
The people that had loudly passed the door
Were people to the ear but not the eye.
They were not sleeping in the shelves of bunks.
I saw no men there and no bones of men there.
I armed myself against such bones as might be
With the pitch-blackened stub of an ax-handle
I picked up off the straw-dust-covered floor.
Not bones, but the ill-fitted window rattled.
The door was still because I held it shut
While I thought what to do that could be done--
About the house--about the people not there.
This house in one year fallen to decay
Filled me with no less sorrow than the houses
Fallen to ruin in ten thousand years
Where Asia wedges Africa from Europe.
Nothing was left to do that I could see
Unless to find that there was no one there
And declare to the cliffs too far for echo,
"The place is desert, and let whoso lurks

In silence, if in this he is aggrieved,
Break silence now or be forever silent.
Let him say why it should not be declared so."
The melancholy of having to count souls
Where they grow fewer and fewer every year
Is extreme where they shrink to none at all.
It must be I want life to go on living.

１人の国勢調査員がそこを訪れると、１００平方マイル四方が伐採されたなか、一軒の家が建っている。調査員はかつてそこには男達しか住んでいなかったことで、女性的に嘆く必要などないとコメントする。

And that not dwelt in now by men or women.
(It never had been dwelt in, though, by women,
So what is this I make a sorrow of?) [13]

形成されるべき家庭が存在しなかった家は見捨てられ、朽ちるままに放置されるよう運命づけられている。そのようなところへ来たところで、彼は住人の数を数えるという使命をはたすことはできない。子孫が残ることもないのだから。人がいないだけでなく、秋には本来美しく紅葉し、時の移り変わりを示す木々は倒され、切り株しか残っていない空虚な空間がそこにはある。

The time was autumn, but how anyone
Could tell the time of year when every tree
That could have dropped a leaf was down itself
And nothing but the stump of it was left

視覚的に空虚なだけでなく、風が梢や葉を渡る音もしない。風が揺らし音をたてるのは家の窓とドアである。ドアは以前乱暴な男達が住んでいたことを思わせるような音をたてるが、部屋の中にはランプ、テーブル、煙突がはずれ足を一本失ったストーブがあるだけだ。その空虚な空間に調査員はもといた木こり達が夕食をとる生活を思い描く。しかし彼らの痕跡は骨さえもまったく残っていない。あまりの空虚さはこの廃屋が家庭的にいかなる生産性ももたなかったこと、周りの自然を消費することを目的としていたことを明らかにする。木こり達はここにあった森の木々がどれだけの価値を消費地でもつのかを考えただけだろう。その後木材は建築資材になり都会で消費され都市化と工業化に利用されただろう。そして消費経済の中では、木材と同様、女性も消費されるべきターゲットとなることから、現在木がないことと、女性がここにいなかったことは同じ意味をもつ。

The people that had loudly passed the door
Were people to the ear but not the eye.
They were not sleeping in the shelves of bunks.
I saw no men there and no bones of men there.

一年以内に、この廃屋も崩れ落ちると予感されるが、それに対して調査員は少しの悲しみも感じない。ここには人も住んでいないが、自然も秋を迎えて死んでいくだけだ。この土地は不毛だと宣言する彼が、"It must be I want life to go on living."と生命が存在し続けることを希望するが、生き残るべき文明はここには何も存在しない。存在するとすれば春になれば芽を吹く自然だけである。生と死を繰り返しながらふたたび森林でこの土地がおおわれるのを待つことしかない。そして彼は国勢調査員として、土地がどのように利用されているかを調べることが職務である。それを果たすためには、文明の存在する世界を訪れる必要がある。国勢調査は国土拡張と、そこへアメリカ国民を送り込み、国を作り上げてきたアメリカのイデオロギーの確認作業である。その結果をもとに１８９０年にはフロンティアの消滅が確認されたことを思えば、ニューイングランドにおいて小規模だが文明の消滅を確認することは、アンチーアメリカ的イデオロギーを表現することにもなるのだろう。あるいは無垢な世界が商業主義によって破壊され、自然がその場所をとりもどし、ふたたびその傷跡を回復しようとする過程に入ったことを意味するのだろう。その事実を確認することもまた国勢調査の果たすべき役割である。この方向転換には反社会ダーウィニズム、反資本主義化、反男性化社会、反消費文化などが含まれるのかもしれない。このように人間あるいは文明と、まったく相いれず、野生を回復するフロストの自然のありようは、資本主義の目指した方向とは全く異なり、ある意味でエコロジー中心の思想へとつながるのかも知れない。

実際彼が長く生活したニューハンプシャーは、大

規模に森林伐採が過去に行われ、後の植林によって現在の姿を取り戻した。また『沈黙の春』を書き、DDTが自然生物を絶滅に追い込むことをとりあげ、全米に環境保護の重要性を知らしめたレイチェル・カーソンもニューイングランド出身である。

フロストはエマソンやソローのように、自然を人間の側に引き寄せて、文学的いいまわしの中にとらえようとしない態度は、フロストが言葉の非理性的な面を、つまりはラカン的にいえば女性性を重要視したといえるだろう。それは時代の要請だったのかも知れないし、偶然そうなってしまったのかも知れない。

まとめ

彼の詩に見られる自然と人間の関係は、よくでてくる廃虚や朽ちつつある人間の行為に見られる。ソローの時代にはすでにニューイングランドはテクノロジーの発展ととそれがもたらす進歩、資本主義的世界がアメリカ社会に根付いていた。それにより従来のジェファソンが描いたパストラル的風景や、生活、文化はニューイングランドでは失われ、そのような現実に対処するべき人のすがたがそこには見られた。それをフロストは題材に選んでいる。たとえばニューハンプシャーの森は木綿産業の発展に伴い、牧場と化していき破壊されていった。当時沢山あった紡績工場の一つで彼自身も働いたことがあるのだが、繊維産業は南へと中心をうつし、さびれて行くばかりだったに違いない。

彼の詩に出てくる自然の扱いを見ると伝統的な面があると同時に、それとは異なる自然観がみられる。昨今のネイチャー・ライティングへの関連もそこに見られるだろう。つまり自然のなかに入っていった人はそこに以前いた人間の痕跡をみつけ、何らかの変化を被り再び文化の中に返っていく。彼のナレーター達が経験するのはカタルシス的な自然の働きではなく、むしろ人間とは相いれない自然の容赦のなさである。自然を擬人化することよりも、むしろ擬人化しようとしてもなおそこに残る不可解さが常に表現されている。

本稿は１９９８年１０月２５日に日本英文学会中部支部第５０回記念大会での「装置としてのアメリカ」と題されたシンポジウムの中で、「Robert Frostの現代性とニュー・イングランドの文化」の表題で発表した原稿に加筆し訂正を加えたものである。

Notes

１　レオ・マークス, (明石紀雄訳), 『楽園と機械文明』, 研究者叢書, 1972, 85-164頁

２　H.N.スミス, (永原誠訳)『ヴァージンランド』, 研究者叢書, 1971, １６７頁

３　George R. Taylor, *The Growth of the United States, 1820 - 1870*(New York: W.W. Norton & Co., 1966) pp. 388,79, 325.

４　ラルフ,ウォルド, エマソン, (小泉一郎訳)「富」,『エマソン選集』３, 日本教文社, 1989, 107頁

５　マイケル, T.ギルモア, (片山厚, 宮下雅年訳)『アメリカのロマン派文学と市場社会』松柏社, 1995, 4頁

６　ラルフ,ウォルド, エマソン, (斉藤光訳)「自然について」,『エマソン選集』１, 日本教文社, 1989. ８８頁

７　ヘンリー, デイビッド, ソロー, (真崎義博訳)『森の生活』JICC, 1983, ８８頁

８　William Dean Howells, "The man of Letters as a Man of Business", *Literature and Life,* (New York: Harper and Brothers), 1902, I - 35.

９　Quoted in E. Anthony Rotundo, *American Manhood: Transformations in Masculinity from the Revoloution to the Modern Era,* (New York: Basic Books, 1993), p. 252.

１０　E. Anthony Rotundo, *American Manhood: Transformations in Masculinity from the Revoloution to the Modern Era,* (New York: Basic Books, 1993), p. 252.

１１　Frank Lentricchia, *Modernist Quartet, (* New York: Cambridge U. P., 1990), pp. 92 - 93

１２　戦争に対して当時の人々が持っていた概念とは次のようにロマンティックなものであった。

> シャルマーニュの時代から１９１４年までおよそ千年ばかりの間、キリスト教世界での戦争は、外敵に対するものであろうと、まったく家族内のものであろうと、一つの連続する伝統という面から意識され、賛美されてきた。そして、その伝統に生きる人々は、少なくとも、いくつかの戦争は正当であるばかりではなく神聖なものであると考えて疑わなかったし、それと全く同じように、そう

した戦いで死ぬことは甘受すべき運命であるばかりか栄光に満ちた出来事であると考えていた。

レスリー, A.フィードラー, (井上謙治・徳永訳)『終わりを待ちながらーアメリカ文学の原型II』 新潮社, 1989, 27頁

13 Robert Frost, *The Poetry of Robert Frost*, Ed., Edward Connery Lathem(New York: Holt, Rinehart and Winston, 1975) pp. 174 - 76.

（受理　平成11年3月20日）